

二〇〇八年十二月



共感覺和歌 戀

キョウカンカク ワカ コヒ

純一

通感者男人、成爲空想上の通感者女人、寄花鳥風月和調度品、吟作那个戀慕心

詠五十首和歌

- 寄雪戀 あはれ冬はみそかにあけし窗のうちによべの枕をしたふ白雪
寄月戀 白露に待つ夜のなかの月過ぎて氷にうつる遠き色人
寄花戀 わが戀は春の梢の霞みつつ散りても花の風の山越え
寄木戀 花籠めにかれにしあとに残る身は雨おきまよふ青柳の絲
寄霜戀 とけあへぬ帯にしたがふ霜の花折りしも床に音のみくだけで
寄霧戀 朝霧に返しし否の文ばかり暗れ惑ふ露の浅くあらなむ
寄雨戀 誰が袖に分きて深さぞ降りまさる眺めの空は答へやはせぬ
寄風戀 ひとかたに思はくの人を松風の色はつれなき我が身にも染む
寄螢戀 火はあまたあまりてなく音はなきすべをいかにも我に諭せ螢よ
寄蟲戀 蚊遣火を離るる影だに數知らずこぬよのなかにくゆる戀かな
寄鳥戀 かくばかり我が心根を語らへば今はた鴉の草ぐきもなし
寄野戀 色うつるうづら衣に露落ちて心はうはの深草の空
寄峠戀 いつとなく戀てふものはつづらをり瀧にあまぎる路のまにまに
寄坂戀 片戀の坂を振り放けかくばかり來しをあはれむ心ありせば
寄海戀 よそに寄るそなたの海を漕ぎ回ひていつこの舟瀬や泊てて見ゆるは
寄磯戀 磯なれ木のかたみに寄するよすがにと頼む風吹く我が身ばかりに
寄河戀 瀬を早み折りにぞ岩に碎けなむただかたへより流らふる河
寄汀戀 今日かけて待ちし涙は落合の誰がいつはりも知らぬ川波
寄橋戀 渡りこぬ遠きけしきを眺めしは夢に夢見し夜半の玉橋
寄舟戀 ひとりきくまた漕ぐ舟の波の音水棹かすむる明星の空

寄車戀 暮れ合ひの濱の小車朽ち果てて沖見し朝の潮風ぞ吹く
寄關戀 降る雨も曇にかはる冬の關また逢坂の契りへだてて
寄町戀 契り來し袖の移り香かれゆきてただ追分に春雨ぞ降る
寄宿戀 戀あまた行き交ふ宿に見る空もかへぬならひのかへるさの月
寄床戀 手鏡はたゞよそながら臥し起きてさても身に染む霜の袂は
寄衣戀 衿の色袖のにはほひも身をかかれて霜の日數に朽ちし雛形
寄帶戀 露霜の帶ぞ夢にもとけあへぬ契りむすばぬなかのかたみに
寄枕戀 いかにせん散らぬ契りを待ちながら音も枯れし夜の塵の枕を
寄筵戀 筵織るこの手力の戀も絶えしくものぞなき袖の露かな
寄褥戀 梅が香のよその袂は春見えでなほも褥の霜のむら消え
寄疊戀 さりとともと装ひを待つ衣ごとに疊の底も露は染みつつ
寄襖戀 心重りふすまの奥に戀閉ぢて夜風の末の漏るひまもなし
寄棚戀 昔より揃へし棚の衣衣もいつ見ることの有明の月
寄鏡戀 思ひ餘る色はみづから知られけりかたみうつろふ鏡見ずとも
寄櫛戀 ぬばたまのしをれし色に迷ひつつ零るる櫛の玉響の音
寄簪戀 黒髪のよその梢に風過ぎて一瓣も添はぬ簪の花
寄笄戀 かきやるはただ笄の花の彩あやなき髪の玉響の空
寄紅戀 ひとりぬる床にうつろふ花の紅今は昔のあけぼのの色
寄香戀 移り香は扇の空に消え果てて過ぎし梢も侘びしさのあと
寄玉戀 にはほはしき玉とぞ人は思はじな身ながらいとふ床の涙を
寄絲戀 契りおかぬ袖は底まではつれけり人香も知らぬ白絲の末
寄墨戀 あはれ文は今日を限りの露の底夢のなかにも墨はなければ
寄筆戀 手末は忍び忍ばずうち揺れて露ひとしほの水莖のあと
寄硯戀 逢ふことは硯のかたき闇の色思ふ心を摩るとばかりに
寄紙戀 はかなしなひとりかきやる手末は重ねてかかる紙遣ひして
寄箸戀 かけあへぬ頼みの戀も身も細りさらに通はぬ夜半の箸箸
寄皿戀 一皿の戀の割れてや散りし水みづから掬ふ頼みだになし
寄桶戀 桶のうちにかたみの涙うち巡り湯浴みのほかに紛ふひまなし
寄盥戀 衣籠めに心の瑕を流さなんのちも頼まぬ戀の盥に
寄傘戀 夢にだに渡らんと思ふ橋姫の傘もあへなき袖の下陰